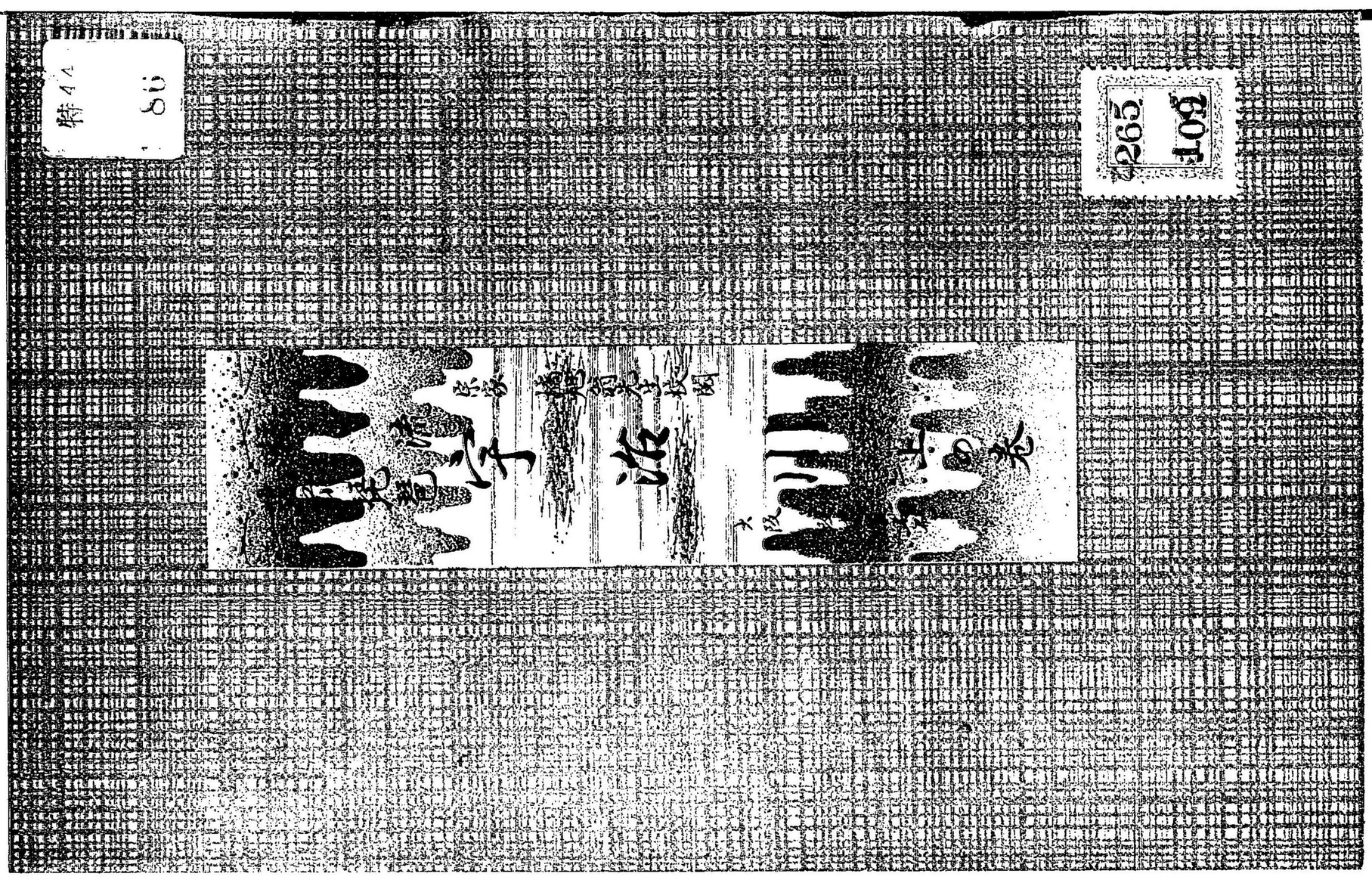

孟子

章句

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題

九州
貞雄
義雄

宇治川　上の巻

玉蘭作

昇るあさ日の将軍と　世にうたはれし義仲が
みやこにたける狼籍は　平相國の專横に
遥かにまさるよしを聞き　院の御心安め奉らむと
ききの兵衛の佐頼朝は　範頼義經を大將として

まづ數萬騎の軍兵を
都へこそは差向けたり
茲に佐々木四郎高綱は
出陣の御暇ごひとして
鎌くら殿にまみゆーに
殊の外なる御喜悦にて
きこゆる名馬生月を
下ー賜ふとありければ
高綱面目身にあまり
今度此賜の助けに頼り

宇治川の眞先渡ー申すべー
敵軍いまだ敗れずーて
臣死ーたりと聞召さば
他人に先ぜられーと知り給へ
若ー生存へてあるならば
せんぢんは高綱なりと
たばーめー給ひ候へと
いと潔く申ーけり
頃は壽永三年睦月中旬
かまくらやまの朝風に

なびく鬣くーげづり
いさみいなく生月の
影もうつらふ由井が濱
畫くがごとき江の島を
左手に眺めこよろぎの
大磯小いそも時の間に
すぎの木立に蔽はる、
函根權現伏したがみ
はや麓をばみーま江や
沼津の右手に名にしたふ

愛鷹やまの山の上に
くもを貫く富士の嶺は
實にやみくにの姿とも
打ち仰がるゝ景色なり
去程に梶原源太景季は
心うき立つ浮きしまが
原に人馬をやすめつ、
討手に上るひとぐの
多くの馬を見てありが
己が賜はりたる磨墨に

優る馬こそなかりければ
さゝ誇りがに見つるに
をりゝ遥の後陣より
競べる馬を引かせつゝ
いそぎてのぼる一群を
誰なるらむと眺むれば
四ツ目打ったる旗じるし
佐々木殿とは知れたれ共
いと訝きは彼の馬なり
君御秘蔵のいけ月に
紛ひなきこそ不思議なれ
吾屢生月を懇望したりしも
遂にみゆるし給はらず
さてはこの景季をば
佐々木に思召替られしな
左らば是非なし今此所にて
佐々木と引組み刺交へ
君に遺恨をはらさむと
氣色ばみてぞ待受ける
高綱かくと知らうまう

霞たなびく絶え間より
梶原源太腕を張り
よろづにさとき高綱は
君に所望したりしよし
やうこそあれと首肯つ

彼方を見ればコハ如何に
肩怒らしてひかへたり
かねて景季いけづきを
それを遺恨に思ふめり
何氣なき狀近寄れば

梶原行く手に立ち塞り
たまはり上り給ふかと
佐々木は態と落着きて
必定敵は宇治の橋を引きつらむ
生月を申請ばと存ぜしも

ヤア佐々木殿には其生月を
言葉銳く問ひ掛くれば
否とよ申すも面伏ながら
去迚乘て渡さう馬はなし
御邊の申させ給ふだに

たんゆるされなき物を
いかで賜はるべう苦もなー
金人どもをかたらひて
誠やかに申しければ
さては左樣に候ひしか

高綱などの申すとも
よし後日に御勘當あらばあれと
窃に生月を竊み候と
梶原俄かに顏色和らげ
我こそ先に盗るべきを

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109